

LEADERS NOW!

一步踏み出して見えた “鮮明な将来像”

カンボジア起業体験プログラム

◎法学部 2年次生
植原 啓貴 さん

梅田キャンパス“KANDAI Me RISE”が起業・創業を目指す学生や社会人を支援する「カンボジア起業体験プログラム」。「何かに挑戦したい」という漠然とした思いを抱いたまま二十歳を迎えた学生が、アルバイトでためた“虎の子”を投資して挑んだ。初の海外挑戦で得た“鮮明な将来像”とは。

「新しい“コト”に挑戦してみたい!」「初めの一步がなかなか踏み出せない!」。梅田キャンパス“KANDAI Me RISE”が、起業・創業を目指す学生や社会人を支援する「カンボジア起業体験プロジェクト」に、法学部2年次生の植原さんが挑んだ。日本から約4,000キロ、東南アジアのインドシナ半島に位置する人口約1,600万人の王国が舞台だ。「漠然と留学とインターンシップを経験したい」と思っていました。このプログラムを学内の掲示で目にして

から、夏休みが近づくとつれて両方経験出来るチャンスは他にはないと参加を決めました。

いつも3歳上の兄の背中を追いつけてきたという植原さん。アルバイトでコーチをするほどのテニスやピアノ、そして法学部に進学したのも兄の影響が大きかった。大学入学後、「何かに挑戦したい」との思いとは裏腹に過ぎていく単調な日々を決別すべく、一步を踏み出した。「自分で稼いだお金で参加することに意義があると思いました。初挑戦の海外で、今の自分の力を試すため、友人を誘わずに参加しました」と振り返る。

カンボジアで市場調査から、企画、現地スタッフの雇用、販売管理まで行うプログラム。渡航前には、カンボジアの現状の講義を受け、求人票の作成など準備を進めた。研修生受け入れのため

植原 啓貴—うきはら ひろき
■1998年、大阪府出身。大阪府立箕面高等学校卒業。法学部2年次生。最近の関心事は限界集落の問題や地方創生。特技はテニス、ピアノ。趣味は映画鑑賞。



に作られた首都プノンペンのレストラン「サムライカレー」を拠点に、18人の参加者が2班に分かれて、プログラムは幕開けた。植原さんの班のメニューは“たこ焼き”と“焼き鳥”に決定。「コストパフォーマンスが良いたこ焼きと焼き鳥でスタートしましたが、たこ焼きはあきらめざるを得ませんでした」と植原さん。大阪のソウルフード“たこ焼き”は、事前調査の結果、「なじみがなく、見た目でも敬遠されてしまいました」と断念。その後は類似メニューの現地価格、販売会場の立地や客層、好まれる味付け、SNSによるPRを調査。ターゲットを設定するペルソナ分析から、製品開発成功の鍵を握る4P(Product, Price, Place, Promotion)と3C(Customer, Company, Competitor)分析に着手した。

商品の可視化とその鮮度を保つために、それまでの白いバックから透明に替えるアイデアを提案するなど、植原さんはチームの企画担当としての才能を発揮。「メンバーとともに王立プノンペン大学で価格、味付けや見た目、そして現地スタッフの見極めなどを調査し、本番に備えました」。日本語学科の男子学生2人を通訳スタッフとして、そして女子学生1人を調理販売スタッフとして雇った。「日本語を話せる男子学生のおかげで現場もスムーズに、また女子学生の笑顔あふれる対応で活気づきましたね」。商品開発、マーケティング、ペルソナ分析、スタッフ雇用……。植原さんの班は規定の原価率をクリアしつつ、終盤2日間に開催されたコンテナマーケットで目標額の150万円を大幅に上回る267万円を売り上げる大成功で幕を閉じた。



▲コンテナマーケットでの販売

「言語、文化、食生活の違いなど、日本と海外の違いを肌で体感しました。将来への課題も見つかりましたが、それ以上に収穫もありました。現地で本学OBの会社経営者の話を聞く機会があり、多くの経験談を聞く中で、『実践的な英語を学ぶならディベート力も身に付くMBA(経営学修士)の取得がベスト』とアドバイスをいただきました。そのためにも1日も無駄にしないように、積極的に梅田キャンパス主催のイベントに参加したり、ネイティブの英語が飛び交うアルバイト先も探します。ブレることなく芯を貫きたいですね」と目を輝かせた。アルバイトでためた“虎の子”を費やして挑戦した初の海外。二十歳の夏を境に、それまで兄の背中を追っていた植原さんの視線の先には、自身の鮮明な将来像があった。

法学の追究と 地方創生に取り組む

母校とのつながりを大切にしながら、
かかわることすべてに全力で挑む

◎福井大学 国際地域学部 准教授
生駒 俊英 さん
—法学研究科博士課程前期課程 2005年修了—

大学教員として「法律学」「民法学」「家族法」を専門にする生駒さん。法律の専門家として家族法を研究しながら、アイススケート部での主将経験と人脈を生かして、“地方創生”にも挑んでいる。



「ワンステップ憲法」
(雄鶏野書院 2015年)



JR福井駅隣接のえちぜん鉄道に乗り約10分、福大前西福井駅を降りると、眼前に福井大学文京キャンパスが広がる。ここが、国際地域学部の准教授として主に「法律学」「民法学」「家族法」を研究する傍ら、母校とのパイプを生かし、地域活性化にも取り組む生駒さんの活動拠点だ。「世界に通用する人材、地方創生として地域に資するような人材を育成してほしいとの地元企業の声から、国際地域学部は2016年4月に発足しました」と、研究室の窓からキャンパスを眺めながら柔和な表情を浮かべた。

法律学を専門とする大学教員の父と、書道家の母の下、大阪で生まれ育った。幼少期は野球やサッカーなどのメジャー競技に夢中になったが、思春期に「自分はあまのじゃく気質かもしれない。人が選ばないことをしてみたい」と思うようになったと言う。中学では、「夏は暑い、冬は寒く、練習が厳しい。選ぶ人が少ないだろう」という思いから剣道部に入部し、副将を務めた。部活制限のある高校時代を過ごした反動から、「大学では絶対に体育会に入部する」と決意していた。大学の入学式後に偶然手にしたクラブの勧誘チラシの中から、「初回滑走料無料」のうたい文句に引かれ、アイススケートは初心者だったにもかかわらず、当時は大学内でも注目度が低かった体育会アイススケート部の門をたたいた。

「高校時代に流行したローラーホッケーで遊んでいたおかげで、フィギュアスケートにもすんなり入れました。当時のアイススケート部は大学内でもあまり存在が知られていませんでしたので、私のあまのじゃく気質がここでも働きました」と生駒さん。1年次生の新人戦での優勝を皮切りに、関西インカレB級も優勝するなど存在感を示し、3年次生から主将を任されるまでに。



生駒 俊英—いこま としひで
■1980年大阪府生まれ。愛知産業大学三河高等学校卒。2003年関西大学法学部卒。05年法学研究科博士課程前期課程修了。08年法学研究科博士課程後期課程所定単位修得後退学。関西大学非常勤講師、岡山吉備国際大学での勤務を経て、2010年から福井大学に着任。在学中は体育会アイススケート部に所属し主将を務めた。趣味はサウナ。好きな食べ物はうどん。



研究室の壁には大好きな映画「Back to the Future」のポスターが貼られている

その後、高橋大輔選手や織田信成選手が入部するようになり、「世界で活躍する選手が入ることでもうまく調和され、部にも良い刺激になったと思います」と当時を振り返った。

3年次生で学問の奥深さに触れた。師と仰ぐ國府剛教授の「家族法」を研究するゼミで、「少数派の学説もしっかりと読みなさい。物事を批判的な視点でとらえることが大切」と先生から教わりました。表面上の勉強ではなく、1つの問題を深掘りすることが法律学には必要だと学びました。博士課程修了後は関西大学の非常勤講師として教員の道を歩み、岡山吉備国際大学を経て現職に。弱者保護を大きなテーマとして、「離婚における子どもへの影響」などの家族にかかわる法律を中心に研究し、毎週月曜日は母校関西大学で「民法詳論2(家族法)」を教えている。「母校で後輩たちに教えられることは一番幸せですね」と生駒さんはほほ笑んだ。

さらに、JR福井駅前の商業施設ハピリン内に2016年から毎年冬季限定でオープンするスケートリンク「すまいるスケート・ハピリンク」で、ちびっ子スケート教室の講師を担う。また、ハピリンクのイベントでは関西大学のアイススケート部を招き、地元を盛り上げる一役に貢献している。生駒さんの座右の銘「何事も一生懸命に」をモットーに、今後も法律学を追究しながら、地方創生にも取り組んでいく。



(左上) 関西大学アイススケート部によるアイスショー
(左下) 子どもに指導する生駒さん
(右) スケート教室の子どもたちに修了書を授与